長谷川栄先生の業績と略歴

略　歴

長谷川栄先生は、昭和八年二月二十二日に埼玉県狭山市に生まれた。昭和二十六年に埼玉県立川越高校を卒業後、東京教育大学教育学部に入学された。教育学科に進んで、昭和三十年に卒業後埼玉県入間郡坂戸町立坂戸中学校に、国語を中心とした教科の教師として四年間勤められた。そして昭和三十四年四月に東京教育大学大学院教育学研究科修士課程に入学される。昭和三十六年に博士課程に進まれ、昭和四十年に同課程を満期退学し、すぐに教育学科の助手に採用された。一年半後の昭和四十一年十月に新潟大学教育学部（長岡分校勤務）に配置替えになり、昭和四十二年十一月に講師、昭和四十四年十二月に助教授に昇任された。

昭和四十九年四月に東京教育大学教育学部に配置替えになり、ここの閉学を見届けられたあと、昭和五十二年から筑波大学に移られて、翌年教授に昇任、以後十八年間、筑波大学の学習指導学の主任教授として研究と指導にあたられた。

この間、昭和五十三年九月から一年間文部省在外研究員として西独においてクラフキー教授、シュルツ教授らのもとで研究を積まれた。

また、昭和六十三年から三年間、筑波大学の教育学研究科長として、平成二年から四年間教育学系長及び評議員として、激務をこなされた。

主な学会活動は次の通りである。日本教育学会会員、関東教育学会会員及び理事、日本教育学会会員、日本教育哲学会会員、日本視聴覚教育学会会員及び理事、日本放送教育学会会員、日本カリキュラム学会会員及び常任理事、日本教材学会会員及び常任理事。

社会的活動としては、文部省小学校指導書教育課程一般編作成協力委員、文部省指導要録改善協力者会議委員を務められた。

研究面での業績

長谷川栄先生は、東京教育大学、筑波大学にわたって、山極真衛先生、冨田竹三郎先生、井坂行男先生が作られた教育方法学と学習指導学の伝統を受け継ぎ発展させてこられた。その主な業績は以下の通りである。

まず長谷川栄先生のライフワークであるヴィルマン(Otto Willmann)の研究がある。「ヴィルマンの陶冶(教授)の特質」(東京教育大学教育学研究集録第1集一九六二)では、財と学習者の働き合いが追究されるが、まとめとして、「学習者の恣意を拘束する対象内容の法則と価値が財として規定され、学習者が自発的に活動してこの対象内容に没入し、自己をこれに一致せしめて受容するところに、対象内容としての財がまさに学習者を陶冶し、同時に、財が財として現実化されるのである。この時に、財の要求と主観の財への没入による陶冶の要求とが、同時に満足されるのである。」と述べられる。これを出発点として、以後、ヴィルマン教授学の社会的観点、教材観、歴史的観点、自立性と統一性、陶冶目的、客観的観点、シュライエルマッヒェル教育学への接近、言語陶冶内容論、発生的方法、ブルシェンシャフトにおける活動、教師養成の実践と思想、と研究を継続され、ヴィルマン教授学の全貌を明らかにされた。特にヴィルマン教授学の成立過程の研究に特色が認められる。竹田清夫氏との共訳で『陶冶論としての教授学』(世界教育学選集73　一九七三　明治図書)も出しておられる。これらの研究を通して、長谷川栄先生は、ヴィルマンの教授学を日本に紹介し、またそれを深められたのである。ちなみに、ヴィルマンに教授学の角度から光を当てておられる研究者は、現在日本では長谷川栄先生ただお一人である。

次に範例方式の研究がある。これは長谷川栄先生が、ヴィルマン研究と平行してドイツの新しいことも研究してみたいという意図で、大学院時代から進めておられたものである。「教材構成におけるエクセンプラリッシュ方式の意味」(山田栄博士退官記念論文集『教育課程と世界観』一九六六年所収)に影響を受けた方は多いと伺っている。ロート、ブルメンタル編『範例方式の授業』(三枝孝弘・平野一郎監訳　一九六八　黎明書房)も訳しておられる。長谷川先生はこれらの研究の中で、範疇的陶冶の意味づけを明確にされ、さらに範例方式を、単元構成や授業展開にも触れながら分かりやすく説明して

おられ、わが国の範例方式の理解に大いに貢献された。

教授学研究の側面がある。これは当然のことながら、ヴィルマンの教授学の研究と並んで、長谷川栄先生の研究活動のもう一つの中心を占める。その内容も教授学、教育的タクト論、教授的変換理論、思考論、学習論、合科教授、システムズ・アプローチ、カリキュラム論、評価論、生徒指導論、と多岐にわたる。恐らくは筑波大学での研究の最後を飾られる論文「教授学の対象と方法」（筑波大学教育学研究集録第一九集　一九九五）では、初めの部分で、「ここで考えたい特に重要なことは、授業で直面する問題を教授と教育の現実構造の中に位置づける視野を広くもつと共に、その問題を教授と教育の根底までに掘り下げて探究する批判的な眼と深い教育的な洞察力を身につけることである。」と述べられる。そしてそれに貢献するはずの教授学を科学的に基礎づける試みが展開される。ここでは、教授学の対象と方法の六つの問い（教授学は研究対象をどんな分野に求めるか、教授学は対象分野をどんな構造において把握するか、教授学はその対象分野において何を研究課題とみなすか、教授学とはどんな意図で研究するか、教授学はどんな科学的方法で研究するか、教授学はどんな理論的立場で研究を進めるか）を設定し、幅広い文献を駆使して解答が試みられる。

最後に授業に関する実証的研究があげられる。院生を指導しながらまとめられたものが中心になるが、長谷川先生は院生を指導されたごく初期の東京教育大学の時代から実証的授業研究に関心を示され、筑波大学では授業研究会を主たる足場にして研究を進められた。比較的最近の研究には「授業における教授方略－「一つの花」の授業の比較分析」（日本教育方法学会・教育方法学研究一七　一九九二）などがあり、そのユニークさが注目された。じっくりと事実を見据え、そこから意味を引き出そうとされる。ヴィルマン研究等一連の教授学研究を背景に、それを日常の授業の分析に生かされていることは言うまでもない。

まとめとして、長谷川栄先生の論文の特徴を述べさせていただくならば、その特徴はゆるぎのない構成感にある。これは学術論文においても、雑誌論文においても、教育学の教科書においても本質的に変わらない。興味のある問題を拾い拾いしながら論ずるのではない。じっと全体を見据え、要因を洗い出し、ピシピシと分類し、個を全体の中にしっかりと位置づけていく。ドイツの教授

学の成果に足場を置き、微動だにしない重厚な教授学を築きあげていかれるのである。

教育面での業績

教育面での業績としては、やはり、数多くの研究者を育てられ、学界、教育界に送り出されたと言うことが特筆されるべきであろう。東京教育大学、筑波大学で直接に長谷川栄先生の指導を受けられた院生の名前をざっと数えてみても平山満義、遠藤忠、白幡富夫、桜井均、中島和美、広田忍、石井仁、神田伸生、浦崎源次、小笠原喜康、上嶋洋一、佐藤善一、林若子、土屋文明、末武康弘、大河原清、吉田武男、徳岡慶一、楊玉珍、李聲韓、白南権、金世坤、桂直美、西岡けい子、斉藤信、景山誠、景山由貴、新井孝喜、樋口直宏の諸氏（順不同）の名前が挙げられる。島田茂樹、助川晃洋（ドイツに留学中）、髙橋佳子、金在明、チャイチャルン・スマリーの五君はもっか博士課程で指導を受けている学生である。

前に長谷川先生の授業の実証的研究への関心について触れさせていただいたが、その他にも、「授業分析によるマイクロティーチングの設計と実施の研究」（一九七九）、「教育実習事前指導プログラムの開発」（一九八〇）、「教職教育用ＣＡＩプログラムの開発研究―教育基本法―」（一九八二）、「授業における「問い」に関する総合的研究」（一九八六～一九八九）、「基礎・基本のとらえ方に関する研究」（一九八八）、「総合大学における教職教育のプログラム開発に関する実証的研究」（一九九三）などがあり、これらはいずれも長谷川先生がおられなければできなかったグループ研究である。

東京教育大学の教育方法談話会を母胎とする教育方法研究会では、会長として長い間、指導に当たられ、また雑務をこなされた。その会誌である「教育方法学研究」は、この号で第一二集となるが、第七集からは長谷川先生の編集になるものである。

その他に、長谷川栄先生は、教育方法研究室の研究合宿である山中湖合宿では皆勤（正しくはドイツに行かれた年だけ休み）で指導された。

以上、長谷川栄先生の略歴、研究面での業績、教育面での業績について紹介させていただきました。長谷川栄先生の今後の益々のご活躍をお祈り申しあげます。

（佐々木俊介）